

浄土真宗本願寺派ビハーラ活動者による生死の問題へのアプローチ

——自由記述式アンケート調査の質的分析——

伊 東 秀 章

I 目 的

(1) はじめに

科学・医療技術の向上により人々の平均寿命が延び、現代の日本は高齢化社会となった。しかしながら、寿命が延びても人が死ぬという事実は、古今東西を問わず不変の問題である。

この生死の問題に、延命治療以外のアプローチがされるようになった。その一つに、1967年にイギリスにおいて Saunders, C. がホスピスケアを始めたことがあげられる。ここが発端の一つとなり、世界的にホスピスムーブメントが起り、1973年に日本では柏木が淀川キリスト教病院にてホスピスケアを始めた (Saunders, 1981・柏木, 2001)。このような中で、これまでの延命治療のみではなく“人生の質”いわゆるクオリティオブライフが重要であるという考え方も生まれてきた。

この問題に対して、日本仏教はビハーラ活動を展開している。この発端として、1985年に田宮が「佛教を背景とした所謂ホスピスはビハーラと呼称することを提案したい」(田宮, 1986)と述べている。その後、田宮や田代、浄土真宗本願寺派など、さまざまな団体がターミナルや医療、福祉の分野において実践活動を展開してきた (伊東, 2010)。本研究においては、浄土真宗本願寺派のビハーラ活動を取り上げ、生死の問題について検討する。

(2) 先行研究の概観

浄土真宗本願寺派のビハーラ活動は、1986年11月に本願寺派研修部内に「ビハーラ (仏教ホスピス) 研究会」の事務局が設置されたことが始まりとされる。翌年に、ビハーラ実践活動研究会と改称され、活動者の人材育成が進められた。シンポジウムの開催や本願寺派の機関紙である「本願寺新報」や「宗報」への記事の掲載など、様々な啓発活動を展開している (伊東, 2011)。

浄土真宗の宗旨をよりどころとする者の社会実践の背景にあるものとして、常行大悲の益がある。これは信心を獲得したものが得られる十種の益のうちの一つに挙げられている（教学伝道研究センター、2004、p.251）。このことに関して、梯（1994a）は、「小慈小悲さえも行ぜられない愚かな身で、人を済度してやろうというような思い上がったことは思うべきではない（中略）愛と苦しみを越えた領域にあらしめようと誓願された大悲の本願に身をゆだねて念仏を申すところのみに、人間の愛の限界を超える大道があるのだ（中略）如来の大悲のうながしを受けて有縁の人びとに念仏をすすめ、もろともに如来の大悲の世界に心を開いていくようにと伝道していくようにもなります」（pp.168-169）と述べている。このように、浄土真宗をよりどころにする者の実践の中心は念仏であり、それを伝えていくことにあると述べられている。

梯（1994b）は、阿弥陀仏の「本願のみ言葉を受け入れて死はむなしい滅びではなく愛憎を越えた安らかな涅槃の浄土であり、無限の『いのち』と光の世界に超出することであるとうなずく心が恵まれてくるならば」、死を受容する心も生まれてくると、ビハーラ活動の目指す一つの姿勢について述べている（pp.87-88）。ビハーラ活動の背景として、浄土真宗の本尊である阿弥陀仏の願いを中心とした活動であることがあげられる。これは活動者の前提でもあり、その相手に対しても伝えていく内容でもある、とされる。このことにより死を受容する心も生まれ、生死の問題を解決していくとされる。

また、奈倉（1994）は、ビハーラ活動は仏教を背景とした宗教者による活動であるとし、その直接的な目的は心理的な安定ではないと、以下のように述べている。「精神的ケアを行うことは宗教者にとって重要な任務であるが、その目的は『心理的安定』ではない。生きることの主体的意味に目覚め、生死を超えて『今』を生き抜く勇気をもたらすことが目的である。その結果として、心の安らぎが与えられることとなろうが、それは仏の働きによるものであり、宗教者が与えるものではない。このような宗教者の本質的役割をよく理解してもらったうえで、医療チームに参加していくことが必要である」（奈倉、p.140）このように、ビハーラ活動は生死の問題を解決することを目的とした活動であり、それは仏の働きによりもたらされるとしている。

そして、友久（2002）は、ビハーラ活動の重要な点は「大いなる宇宙のいのち、すなわち阿弥陀如来のいのちの中に生かされている自分たちであることを共に感じる必要がある」（p.226）と述べている。またビハーラ活動者が信心決定していることの重要性も述べ、宗教的なケアが大切であると述べている。

以上のように、ビハーラ活動の背景の中心にあるものは、阿弥陀如来の働きであることがわかる。この働きにより活動者とその相手が共に支えられ、生かされているという前提がある。そして活動者は「何よりも人の痛みのわかる人間になろうとする」（梯、1994b、p.89）という

実践を行うのである。

その他に、奈倉（1994）は、ビハーラ活動では精神的な問題を仏教カウンセリングにより解決していくとあり、具体的には医療担当者との協力や、家族や近親者への精神的支援が重要であることも述べている（p.142）。また、友久（2002）は、ビハーラ活動を①痛みやだるさなど身体面に対する対応、②死への不安など心理面に対する対応、③自分の魂の問題など宗教面に対する対応、と3つに分けて説明し、相手の話を聞くこと、共感すること、信頼関係の重要性について述べている（pp.218-229）。このようにビハーラ活動においては、心理カウンセリングの姿勢を重要視していることが述べられている。

以上のように、本願寺派のビハーラ活動の理論的背景について言われているが、ビハーラ活動の実態調査についての資料は少ない。そのため、実際のビハーラ活動はそれぞれの現場で試行錯誤なされてきたが、検討・研究されることが少ない。そこで、本研究においては、ビハーラ活動者養成研修会の受講者を対象とした実態調査を行う。この調査から得られたデータを帰納的に検討し、理論との考察を行うことを目的とする。

本研究は、ビハーラ活動者養成研修会の受講者の生死の問題についての応答を明らかにすることを目的としている。また、受講者の現状を把握し、その現状と理論との考察を行う。そして、ビハーラ活動者養成研修会の受講者がビハーラ活動者の実践のためのガイドラインの一つとなると考えられる。

（3）問題の設定

このビハーラの活動のひとつに、生死の問題についての応答がある。例えば、「死んだらどこへ行くのか」「死にたくないがどうしたらいいか」といった問いである。このような問いに対して、現場の活動者がどのような応答をするのか、という実態を明らかにすることにより、ビハーラの生死の問題へのアプローチについて考察する。

本研究においては、ビハーラ活動者養成研修会の受講者が、余命3ヶ月と告げられた癌患者を想定した場合、どのような応答を試みるのかをアンケート調査から明らかにする。

II 方 法

（1）サンプリング

対象は、浄土真宗本願寺派が開催した第21期ビハーラ活動者養成研修会の参加者41名である。ビハーラ活動者養成研修会とは、1987年以降、ほぼ毎年浄土真宗本願寺派の社会部が行っており、2010年度で21期となる。（浄土真宗本願寺派社会部、1999）。

2010年度の研修会の応募資格は、①浄土真宗本願寺派の僧侶・門信徒で、原則として20歳以上65歳未満であること、②1年間にわたる基本学習会・実習に出席できること。また、報告書

提出など研修会に対して前向きに取り組める者、③研修会修了後、教区ビハラーに所属し活動することのできる者、である。また、ビハラー活動に関するテーマのレポートを作成しなければならない。この研修会は、現在実際に活動しているビハラー活動者や、活動志望者が参加する。これらの参加者は、ビハラー活動に興味・関心を強く持っている人である。

本研究のデータは、2011年3月2日に行われたビハラー活動者養成研修会「ビハラーカウンセリング総合実習とまとめ」において、講師である友久久雄が研修の一部として行った質問を整理したものである。

(2) 質問項目

設問は、ビハラー活動者に対して、癌患者から問われた状況を設定して問うた。具体的には、次の5問である。

問い① 先生、私は医者から癌で3ヶ月しか命がないと言われました。私は死にたくないのです。どうすればいいですか（教えてください。）

問い② 先生、私はこの3ヶ月の間どうして生きていけば良いのですか（教えてください。）

問い③ 先生、私だけが癌になるなんて理不尽です。どうして私だけが癌にならないのですか（教えてください。）

問い④ 先生、死んだら私はどうなるのですか、私不安なのです（教えてください。）

問い⑤ 先生、本当に地獄や極楽はあるのですか。私は嘘だと思うのですが（教えてください。）

この5問に対して活動者がどのように答えるのかを、自由記述式のアンケートにより回答を求めた。

(3) 自由記述データの分析方法

最初に、自由記述式アンケートで得られた結果は、全てデータベース化された。回答は長文のものもあったため、回答に該当すると思われる「一つのつながりのある文章」を一つの単位として抽出し、それぞれについてコーディングを行った。その後、似ているコーディングの種類を集めて、分析結果とした。

また、この分析方法は、佐藤（2008）と木下（2003）を参考に行った。

III 結 果

アンケートにより得た答えを、データベース化し、それぞれについて調査者が読み込んだ。読み込む中で、問いに対する回答をコーディングし、共通するものは同じカテゴリーとした。

研究者の分析の視点は、可能な限りコーディングの多様性を残し、生死の問題に対するアプローチを考える基礎的な資料となること、である。ただし、少数の結果に関しては分類に合致しなかったため、結果に入れていない。

また、以下の記述において、データを「 」で記した。またデータは基本的に原文のままであるが、一部、誤字脱字を直し、体裁を整えた。

(1) 問い①の結果

『①先生、私は医者から癌で3ヶ月しか命がないと言われました。私は死にたくないのです。どうすればいいですか（教えてください。）』の質問項目に対する回答は、小さなグループで8つに分類され、さらにそれらは大きなグループとして4つに分類された。小さなグループと大きなグループは以下のようにコーディングされた。

問い①についての結果のコーディング

- a 仏教・宗教・ほとけ・いのちについて伝える
 - i 仏教やほとけの話を活用して、対応する
 - ii いのちは次のいのちにつながっている
- b 関わる上で相手の気持ちを聞き共に考える
 - i 相手の気持ちを聞き、つらい思いに寄り添っていく
 - ii 共に話し合いながら考える
- c 死についての話し合い
 - i 「死にたくない」ということの原因を追及する
 - ii 死は逃げられないものとしてとらえる
 - iii ビハークラ活動者自身も死ぬ存在であり、死にたくない思いがあることを伝える
- d 生きていく上での指針を探す

以下に、それぞれの項目の例を挙げて示す。項目の例は、多様なものを挙げ、類似するものは省略した。

- a 仏教・宗教・ほとけ・いのちについて伝える
 - i 仏教やほとけの話を活用して、対応する

「よろしかったらみ仏のお話をさせていただいてよろしいですか」

「この世に自分を生みだして下さった大きなもののもとに帰るしかないです。真宗では浄土に往くと言います」

「仏教では、生死一如と言い、生も死もどちらも同じと考えます。死の不安はなくなりませんが、そのような私を阿弥陀仏という仏様が、命終わる時に仏にさせて下さいます。」

「一度、お念仏をとなえてみてはどうでしょうか？何かみつかるかも知れませんね」

「知り合いにすばらしい宗教家がいるので紹介します。」

ii いのちは次のいのちにつながっている

「あなたの先祖が生きてきた証はあなたの中にある。あなたの生きてきた証も、すべて残っていく。そして未来のいのちへとつづいていくのです」

b 関わる上で相手の気持ちを聞き共に考える

i 相手の気持ちを聞き、つらい思いに寄り添っていく

「つらいでしょうね。たいへんですね。生まれて死なない人はいないと言ってもつらいですね。そうですか。ガンですか。3ヶ月ですか。そうですよね。」

「家族の方は何ておっしゃってますか？死んだらどうなるんだろう、家族や仕事いろんなことが心配ですよね。」

「3ヶ月の命とはどういうことですか。症状はどのようなかんじですか。死にたくない気持ちとはどんな気持ちなのか具体的に教えて下さい」

ii 共に話し合いながら考える

「いっしょに考えてみませんか？あるいは話をしませんか？」

「あなたは私によく問うて下さいました。ありがとうございます。」

c 死についての話し合い

i 「死にたくない」ということの原因を追及する

「今あなたは死にたくないとおっしゃいましたが、その一番の理由は何だと思えますか。やり残したことや、家族の行き先が心配だから死にたくないと思うのですか。それともそうした具体的なことは別のもっとばくぜんとした思いがあなたは今お持ちなのですか？」

ii 死は逃げられないものとしてとらえる

「残念ですが、『死』を避けることのできた人はいません。」

「死にたくない、と思うのは当然のことだと思う」

iii ビハーク活動者自身も死ぬ存在であり、死にたくない思いがあることを伝える

「私も死にます」

「私も出来ることなら死にたくありません」

d 生きていく上での指針を探す

「あなたは生きて何がしたいですか？例えば医者の方の言った通りあと3ヶ月だとしたら、何が心配で、何がしたいですか？」

「もし元気でこれからも生きれるとしたら何をしたかったですか」

(2) 問い②の結果

「②先生、私はこの3ヶ月の間どうして生きていけば良いのですか（教えてください。）」の質問項目に対する回答は、小さなグループで6つに分類され、さらにそれらは大きなグループとして5つに分類された。小さなグループと大きなグループは以下のようにコーディングされた。

問い②についての結果のコーディング

- a 仏様の話をさせていただく
- b 相手に聞き明確にしていく
 - i 相手がどの様に考えているのか聞く
 - ii 問題そのものを考える
- c 生死に向きあい考える
- d 日常のサポートをする
- e 相手に新しい考え方を伝える

以下に、それぞれの項目の例を挙げて示す。

a 仏様の話をさせていただく

「私にもよくわかりません。けれども、もしも私に望んでくださるのでしたら、私はご一緒に仏様とお話を聴いたりお話ししたりさせていただくことはできます。」

「まず、手を合わせてください。仏様が、そばにいてくださってます。」

b 相手に聞き明確にしていく

i 相手がどの様に考えているのか聞く

「これからの3ヶ月をどうやって生きていけば良いのか悩んでいらっしゃるのですね。あなたは、何かやりたい事がありますか？それとも、死んだらどうなるのか不安になっていらっしゃるのでしょうか？せっかく生きている命ですから、これからの3ヶ月を楽しく過ごすか、辛く過ごすかあなたの気持ち次第かもしれませんね。あなたは、どうやってこれからの3ヶ月を過ごしたいと思いますか？」

ii 問題そのものを考える

「できる限り楽しい思いをして忘れていたいというのもあるでしょう。しかし、私達の多くは自分につきつけられた現実を何らかの形で解決した方が気持ちが落ち着きます。あなたの現実、あるいは問題は何だと思いますか？まず、それを考えてみませんか？」

c 生死に向きあい考える

「あなたは今までに何のために生まれてきたか考えた事がありますか。楽しかった事、つらかった事、うれしかった事等、いろいろ思い出して、話してみませんか。そして病気になったことがとてもつらい、苦しい事として受けとめて、これからどうすれば良いか話してみませんか。生命あるものとして生まれて、病気になりやがて老いが来て死をむかえる。という事を受けとめてみましょう。」

d 日常のサポートをする

「毎日を悔いなく過ごすように心がけてみる。一つ一つ、できることをこなしていく。色々な人と話をする。美味しいものを食べる。行ったことのないところへ行ってみる……………そういった一つ一つに、真剣に取り組んでみる。」

「特別なことをしようと考えているのか聞いてみる。何も思いつかないのであれば、日々の生活を、そのまま過ごすことを進めるが。治療や死の準備について考えているのであれば、具体的にどうしようと思うかきいてみる。それが決定されていなければ、情報収集などを手伝う。いつも通りの日常生活を送ることが、できそうであれば、話し相手になりながら生活をサポートする体制を整える。」

e 相手に新しい考え方を伝える

i 一日一日を大切に過ごすように話す

「あなたの両親のことを思い出して下さい。両親が今おられたらどう思われるか。大切なあなたをどう育てられたか、今まで生きてこられたのは両親が大事に育てて下さったでしょう、その思いを大切に一日一日を感謝の気持ちで過ごしませんか。私もそうしたいと思います。きっとところが落ち着くと思いますよ。」

「一日一日を大切に、有意義ある時間をすごしましょう。どんな最後を迎えたいのか、何かいい残すことがありますか、あなただけが死んでいくではありませんよ。」

ii 自分だったらどうするか伝える

「もし私が同じ立場になれば、その苦しみはいてもたってもおれませんね。しかし私だったら残された時間を大切に、毎日を精一ぱい生きていこうと思います。3ヶ月がもっともっと長くなるかもしれないこともある事を自己体験の書物を書いた人の本を読んだこともあります。」

(3) 問い③の結果

「③先生、私だけが癌になるなんて理不尽です。どうして私だけが癌にならないのですか(教えてください。)」の質問項目に対する回答は、小さなグループで7つに分類され、さらにそれらは大きなグループとして5つに分類された。小さなグループと大きなグループは以下のようにコーディングされた。

問い③についての結果のコーディング

- a 仏教を中心に考える
 - i 仏を中心として考えていく
 - ii “縁”によって考えることをうながす
- b 共感・寄り添う・より詳しく聞く
- c 癌と向きあう
- d 医療的なサポートの紹介
- e 新しい考え方を相手に伝える
 - i あなただけが死ぬのではないと伝える
 - ii 介入的な応答をする

以下に、それぞれの項目の例を挙げて示す。

a 仏教を中心に考える

i 仏を中心として考えていく

「一緒に（ガンになった理由について）阿弥陀様におたずねしていきたい」

「貴方だから、ではなく、こういう生き方も有るのだと言う事に気付かせていただいた事を仏様に感謝しましょう。お念仏申しませうね。あるがままを受け入れましょうよ。」

「みんなお浄土にかえられる身なのです。」

「み仏の大きな大きな世界の中では必要な事だったのかもわかりませんねえ」

ii “縁”によって考えることをうながす

「生命あるものとして生まれてきてみんなが幸せにくらしてゆけたらいいけど、だれもみんなこの先、何に出会うかわかりません。何事もなく幸せにくらせたらいいけど、みんな縁があれば色々なことにぶつかります」

「やはり“心”と“縁”のことが中心と思います。良い悪いでもありません。仏教では“縁起”と言います。よかったらゆっくり食事でもしながらお話をきいて、こちらのみ仏のお話をさせていただきたいと思います」

b 共感・寄り添う・より詳しく聞く

「そう、どうして私だけがガンになって……理不尽ですね、本当に。」

「いざ、自分がガンになったらつらいですね」

「その理不尽な気持ちをもっと詳しく聞かせて頂けませんか？と聞く」

c 癌と向きあう

「ガンと向きあってもらうことが大切だと思う。そこからどうするか、どうしていくか。ガ

ンと共に生活をしていくかを一緒に考える」

「上手くがんと付き合っていく方法がないか、考えていきませんか？」

d 医療的なサポートの紹介

「ガンも今はとても治療が進んでいるそうですよ。痛みも余り感じなくてよい方法もあるそうです。」

「治療を望むのならば、同じ病の仲間をさがしてあげる」

e 新しい考え方を相手に伝える

i あなただけが死ぬのではないと伝える

「私も明日事故でしんでしまうかも知りません」

「別にあなたが何かに選ばれたわけではないと思いますよ。病気は誰でも患うものです。」

「あなただけではありませんよ（中略）ガンになったことはつらいでしょうが、現実として受け止めて」

ii 介入的な応答をする

「今のあなたを見ていると、それほどまでに怒りをお持ちのようにも見受けられません。ひょっとしたらあなたはあなたなりの理由を見いだしている。あるいはガンであるという事実を勇気をもって受け入れようとされているのではないですか。」

「早くわかって良かったじゃないですか？今はガンの治療も進んでますから、早く治療されれば治るんじゃないでしょうか？」

(4) 問い④の結果

『④先生、死んだら私はどうなるのですか、私不安なのです（教えてください。）』の質問項目に対する回答は、小さなグループで9つに分類され、さらにそれらは大きなグループとして3つに分類された。小さなグループと大きなグループは以下のようにコーディングされた。

問い④についての結果のコーディング

a 阿弥陀仏の働きにより、浄土で仏になる

i 浄土へ

ii 仏になる

iii 阿弥陀仏の働き

iv 親鸞聖人からのお取り次ぎ

b 共感したり聞いたりする

i 不安について聞いたり、話し合ったりする

ii 死後の話で患者が信じているものを聞く

c 死についての事実に・解釈的な回答

- i 全ての人が死ぬ
- ii 死後についてはわからない
- iii 死後についての新しい解釈を伝える

以下に、それぞれの項目の例を挙げて示す。

a 阿弥陀仏の働きにより、浄土で仏になる

i 浄土へ

「浄土真宗の場合はね“そくとくおうじょう”といってね、亡くなるとすぐにお浄土にかえるんですよ」

「みんなお浄土でまったださってます」

ii 仏になる

「人はみな亡くなったら仏様になります。残った家族の方の心の中で見守っています。お浄土の国という所で今まで亡くなられた方とお会いできますよ。」

iii 阿弥陀仏の働きで

「私を救って下さるのが阿弥陀様です。死ぬのが嫌な私こそ、仏様のお目当てです。『南無阿弥陀仏』とお念仏申す者を、必ず救うと仏様に誓っておられます。この世の縁がつきるとき、浄土に生まれ仏とならせて頂きましょう。」

「そういう不安だらけの私たちに、『心配なくていいよ』と私たちがいつも背中を向けてしまっていた阿弥陀さまというほとけさまがはたらきかけてくださっているのですよ。」

iv 親鸞聖人からのお取り次ぎ

「親鸞聖人がおっしゃるには、私達は死んだらお浄土へ行き、仏になるのです。」

b 共感したり聞いたりする

i 不安について聞いたり、話し合ったりする

「不安は誰でもですね。私もそうです（中略）どうか二人で今の不安を一つ一つ話し合いませんか。時間をかけて。」

ii 死後の話で患者が信じているものを聞く

「何か心の寄りどころとされる宗教はありませんか？」

「あなたはどうなるのか？というところだと思われませんか？どうなったらいいですか？というところだったらいいなと思われませんか？と聞く。そしてそれに対しなぜそう思われたのですかと聞く。」

c 死についての事実に・解釈的な回答

i 全ての人が死ぬ

「いずれ私も行きます。わたしだけではありません。皆一緒です。」

「自分の存在がなくなっていくと考えると、苦しくなりますね。でも止めることができないのです。」

ii 死後についてはわからない

「死んだらどうなるのかは、私にも分かりません」

「私も実際に死んでいないので、どうなるかはわかりませんが」

iii 死後についての新しい解釈を伝える

「体は焼かれてなくなりますが、あなたとの思い出を持つ人はいっぱいおられるでしょう。人の記憶の中に生き続けるのではないのでしょうか。」

「人が死んだらよく『往生する』って言いますよね。あれは、よく見ると往って生まれると書くのですよ。だから、きっと次の生を生きるのだと思います。」

iv 死の向こう側のことについて教わることを進める

「死が不安なのは死の向こう側のことについてはっきりと自信をもって教えてもらった経験がないからではないでしょうか。少なくともそのことを聞いていればあなたの不安の質はかわっていくと思いますよ」

(5) 問い⑤の結果

「⑤先生、本当に地獄や極楽はあるのですか。私は嘘だと思うのですが（教えてください。）」の質問項目に対する回答は、小さなグループで12個に分類され、さらにそれらは大きなグループとして3つに分類された。小さなグループと大きなグループは以下のようにコーディングされた。

問い⑤についての結果のコーディング

a 阿弥陀仏によって救われることが、お釈迦様や親鸞聖人によって明らかにされている

i 私にとって浄土はなくてはならない場所

ii 阿弥陀様は私たちを浄土に生まれさせる

iii 地獄があるか、という問題ではない

iv お釈迦様や仏さまや親鸞聖人がおっしゃっていることを伝える

b 相手にどう思っているのかを聞く

c 死後の世界について考えていること・言われていることを伝える

i あるかどうかはわからないが、あると信じたい

ii 死後の世界が何かあると思う

- iii 今を大事に生きることで極楽と地獄ができる
- iv 人の心の中にあるものではないか
- v この世が地獄
- vi 方便の1つ
- vii 自分の力では死後についてはわからない

以下に、それぞれの項目の例を挙げて示す。

a 阿弥陀仏によって救われることが、お釈迦様や親鸞聖人によって明らかにされている

i 私にとって浄土はなくてはならない場所

「ただ1つ言えることは、極楽浄土というのは私にとって無くてはならない場所だということです。自分も極楽へ生まれ、仏に成らせていただくという事はもちろん、大好きだった祖母や、祖父、沢山のご先祖方が私を待っていてくれる世界、又、南無阿弥陀仏と私にははたらいいてくれる世界は私にとって極楽があるのか？ないのか？ではなく必ずあってくれる世界といただいています。」

ii 阿弥陀様は私たちを浄土に生まれさせる

「阿弥陀様は私たちみんな一人のこらず、お浄土にうまれさせると誓ってくださっております」

「お浄土には地獄はありません。心安らかに毎日を精一杯生き、念仏生活を送ることによりお浄土（極楽）に往かれます。」

「私も実際に見てきた訳ではありませんが、地獄は無くとも極楽浄土はあると信じています。お浄土でなつかしい方々と逢えると思っています。だって死んで終わりではあまりにも自分がみじめに思うでしょう。死後も生きて行く世界があるということは素晴らしいと思いませんか。仏さまにそうさせていただくことができるということは。」

ii 地獄があるか、という問題ではない

「すばらしい方（親鸞聖人）に出会えて思うことは、地獄があるとかないとかそういうのはぜんぜん問題になりません。」

iii お釈迦様や仏さまや親鸞聖人がおっしゃっていることを伝える

「お浄土はあると（その方に）言う。私は死んだ後のことはわからない。でも私が言ってるんじゃないで仏さまがおっしゃってる。その方と、一緒に聞かせてもらいたいと思っている事を伝える。」

「実は私も経験したことがないから分からないのですよ。ただお釈迦様や親鸞聖人がおっしゃっていることを心から全て信じる事が出来る人にとっては極楽浄土はあると思います。」

b 相手にどう思っているのかを聞く

「なぜウソだと思われるのですか？あなたはどのような所があるのだと思われますか？そしてどのような所があればいいと思われますか？など質問者の持っているイメージや意見を聞く」

c 死後の世界について考えていること・言われていることを伝える

i あるかどうかはわからないが、あると信じたい

「お念仏を唱えることで、いつかお浄土へ迎えられたいと私は思っています。もし、本当に浄土がないのだとしても、信じること、信じてその道を行くことこそに救いがあるのではないのでしょうか。」

「あるとも言い切れないですが、ないとも言い切れないでしょう。だったら、私はあると信じていますよ。」

「極楽は『必ずあってほしい』と願っています。今の自分の悩みも苦しみもなく、自分自身の心の醜さに嘆く事のない世界ですから、是非、その世界に往き煩惱のない仏として生まれ、同じ悲しみを抱く人々を救いたいです。」

ii 死後の世界が何かあると思う

「私は地獄も極楽もあると思います。もちろんよくいう鬼がいるとか、蓮の花がさいてという世界があるというのではなく、私自身の考えを超えた世界があると思います。ですから、それを言葉にあらわして答えることはできません。しかし死ねば何もないという事の方が、私にずっと嘘のように思えるのです。何かがあります。」

「あの世もあると考えた方が良い様に思います。(中略) 地獄極楽はともかく、この世だけでわたしもあなたも居なくなるとは、悲しい話じゃありませんか？少なくとも、私は、あの世はあると信じます。」

iii 今を大事に生きることで極楽と地獄ができる

「今を一生懸命生きる事で極楽があるのではないのでしょうか？あるとしたらどちらに行きたいですか？自分の生き方で地獄も極楽もつくっているのではないのでしょうか。」

iv 人の心の中にあるものではないか

「人の心の中に地獄も極楽もあるのではないのでしょうか」

「地獄は、私自身の心、気持ちがそう思うことではないのでしょうか？ねたみ、そねみ、優越感など、自分中心の気持ちのなかに、地獄は有ると思いますよ。お念仏させて頂いていると、心が安らぎますでしょう。それが一番だと思いますよ。心の安定が極楽だと思いますよ。」

v この世が地獄

「地獄はこの世にあると思います。阿弥陀様を信じる事が出来なければ、この世にありな

がら苦しむことが色々多く出てきます」

vi 方便の1つ

「日々の生活の中で精一杯周りのこと、周りの人と心合わせて生活をすることを目標にするための方便だと思います。」

「生きていく中で、我が身を振り返り、悪い行いを少しでもなくし、良い行ないを積み重ねて往くためにも、地獄、極楽という世界をつくり、地獄より、極楽世界をめざそうという話しを作り出しておられるのです。」

vii 自分の力では死後についてはわからない

「地獄や極楽があるのかどうか私もわかりません」

「見えないから分からないですよ。でもあります。私たちが今、生きているんだから。」

IV 考 察

問い①から⑤までは全て癌患者との応答を想定しており、生死に関する場面である。この問いに対する回答全てを整理する。

その結果、問い①-a・問い②-a・問い③-a・問い④-a・問い⑤-aは、‘A 仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答’と整理された。

問い①-b・問い②-b・問い③-b・問い④-b・問い⑤-bは、‘B 相手に寄り添い・共感・共に考える姿勢’と整理された。

問い①-c・問い②-c・問い③-c・問い④-c・問い⑤-cは、‘C 生死に関する話し合い’と整理された。

問い①-d・問い②-d・問い③-dは、‘D 生活や医療的なサポート’と整理された。

問い②-e・問い③-eは、‘E 新しい考え方の提示やアドバイス’と整理された。

(1) 仏教や宗教的応答と相手へ寄り添う姿勢

浄土真宗の社会実践の理論的な枠組みは、阿弥陀仏からいただいた大悲の実践、すなわちお念仏を中心とした実践が重要視され、そのことにより生死を超えていくということであった。この点については、A 仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答とC 生死に関する話し合いがそれに対応した、実態であると考えられる。ビハラー活動者が、実践の中で念仏を伝えようとし、生死の問題に向きあっていることがわかる。

まず、仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答(A)は、具体的に見ると以下のごとくである。問い①に対する答えのa-iにある「よろしかったらみ仏のお話をさせていだいてよろしいですか」という言葉は、相手に仏の話をするための‘許可を取る’という行為である。また、‘内容の伝達’に関しては、a-iにあるように、「この世に自分を生みだして下さった大き

なもののもとに帰るしかありません。真宗では浄土に往くと言います」「仏教では、生死一如と言ひ、生も死もどちらも同じと考えます。死の不安はなくなりませんが、そのような私を阿弥陀仏という仏様が、命終わる時に仏にさせて下さいます。」と様々な伝え方をしていることがわかる。そして、「知り合いにすばらしい宗教家がいるので紹介します」などの、'紹介' といった伝え方もある。このように、実践場面において、'許可を取る' '内容の伝達' '紹介' などの様々なアプローチを通して、お念仏の実践がされていることがわかる。実際には、活動場所や活動者と相手との関係などにより様々な伝え方は変わると考えられる。

このときに、重要になってくるのは相手に寄り添い・共感・共に考える姿勢 (B) の対応である。このような対応は、ビハーラ活動のための理論として重要視されていた心理カウンセリングの特徴である。問い①の b-i にあるような、「つらいでしょうね。大変ですね」といった '共感的応答' や、「家族の方は何とおっしゃってますか?」という '家族への配慮'、'死にたくない気持ちとはどんな気持ちなのか教えてください」という '相手への配慮'、などがある。このような応答や配慮により、活動者が相手との信頼関係を構築し、より相手を詳しく理解する態度がみられる。

このような相手を理解しようとする姿勢は、心理カウンセリングにおいて最も基本的であり、かつ重要である。この積み重ねにより形成される感情の疎通性のことをラポールという。これは、クライアントとカウンセラーの間に温かい感情の交流があり、安心感と信頼感のなかで自由に考えや気持ちが表現され、互いを理解し合えるような関係性をいう。この関係をカウンセリングの初期において構築することが重要であるとされる (小池、2004、p.41)。ビハーラ活動においても、相手に寄り添う姿勢を持つことにより、実践においてラポールを構築することが重要である。そのことにより、仏教や宗教に関する応答や、生死に関する応答への理解も促進されることが考えられる。

また、この活動者の相手が仏教や宗教に対して嫌悪感や抵抗を持っている場合がある。この場合は、無理に宗教的な対応をすべきではない。もし、このような場合に宗教的な対応をしたならば、相手に寄り添い・共感・共に考える姿勢とはかけ離れた対応となり、信頼関係を築けないと考える。このような場合は、むしろ生死に関する話し合い (C) の対応が参考になる。

(2) 生死に関する話し合い

生死に関する話し合い (C) の対応を、問い①の c-i からみると、「今あなたは死にたくないとおっしゃいましたが、その一番の理由は何だと思えますか。」といった '死にたくない理由をたずねる質問' や、「残念ですが『死』を避けることのできた人はいません」といった '死の不可避性の直面化'、'私も出来ることなら死にたくありません' といった '活動者自身の死への想いの伝達' などがあげられる。これらは、仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答 (A)

のような宗教的な用語による対応ではなく、日常的に用いられる用語を使った生死の問題に焦点を合わせた応答である。この応答は、仏教や宗教に対して嫌悪感や抵抗を持っている人に、生死の問題について考えるきっかけを促す応答である。

以上のように、本願寺派のビハラー活動者はお念仏を中心とした実践や、生死の問題に対してアプローチしていると言える。また心理カウンセリングの視点を重要視していたことも実践の成果になっており、相手を理解するようにつとめており、活動が促進されていると考えられる。これらは理論的な枠組みが実践においても活用されていることを示すものである。

さらに本研究により、その具体的な実践方法について示唆されるところが多くある。仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答(A)に関するならば、相手に仏の話をするための‘許可を取る’といったことや、宗教家の‘紹介’などの実態が明らかとなった。このような実践者の現場における考えが明らかになることで、今後初心者や経験者を問わず、この結果を自身の活動を省みる基準の一つにすることができる。そうすることで、活動者自身が相手への関わりの柔軟性を向上させたり、自己の活動について内省することができ、今後の活動の議論をより活発にすることができる。

(3) 生活や医療的なサポート

また、生活や医療的なサポート(D)や新しい考え方の提示やアドバイス(E)のような実践がされていることも実際に明らかとなった。まず、Dについては、問い①のdを見ると‘生きていく上での指針を探す’として、‘あなたは生きて何がしたいですか？例えば医者の方の言った通りあと3ヶ月だとしたら、何が心配で、何がしたいですか？’や‘もし元気でこれからも生きれるとしたら何をしたかったですか’などがある。この応答は、問われている内容が‘私は死にたくないのです。どうすればいいのですか？’という問い①の答えに直接的に答えていない。この応答に対する解釈を多様に考えてみると、‘日常的な悩み事から始める’や‘生きている今に目を向ける’、もしくは‘生死の問題に対する応答の回避’ともとれる。それぞれのケースにより対応の多様性があるため、どの応答が正解ということはない。しかしながら、Dの応答は、生死の問題から日常的問題へ話を展開させていることを活動者は認識しておく必要がある。このことにより、活動者の相手が日常的問題から冷静に話を始められる場合もあれば、活動者が相手のニーズに答えていない可能性もあると考えられる。

他に、問い②のdでは‘治療や死の準備について考えているのであれば、具体的にどうしようと思うかきいてみる。それが決定されていなければ情報収集などを手伝う’といった‘情報収集’のサポートや、問い③のdの‘治療を望むのならば、同じ病の仲間をさがしてあげる’という‘仲間探し’のサポートといった具体的な援助を想定している。

このような生活や医療的なサポートは、援助活動の一つと言える。しかしながら、日常場面

や医療的なサポートをするということは、容易なことではない。例えば、安易に様々な情報を与えることで心理的な負荷を与える場合もある。これらの応答がどのように相手に受け取られるかについては、今後フィールド調査を通して検討されなければならない。現状における実践のためには、医療や心理臨床、ソーシャルワークの知見が活用できる。

(4) 新しい考え方の提示やアドバイス

また、新しい考え方の提示やアドバイス(E)がある。これは、問い②のeに‘一日一日を大切に過ごすように話す’‘自分だったらどうするか伝える’などの応答があった。また問い③のeに‘あなただけが死ぬのではないと伝える’や‘介入的な応答をする’があった。これらはもともと、活動者の相手は持っていなかった考え方を提示するということである。このことは心理臨床の観点からみると、介入的な応答と行うことができる。この応答は相手の価値観や人生観を変える可能性があり、注意して行う必要がある。心理臨床においては介入的な応答はされず、クライアント自身が気づいていくことを待つアプローチもある(Rogers,C., 1942)。このように、活動者が相手へ関わる時、新しい考え方を提示したり、アドバイスすることは非常に高度な専門性が要求されるので、今後フィールド調査などを通して、具体的にその内容を検討していく必要がある。

以上をまとめると、A 仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答、B 相手に寄り添い・共感・共に考える姿勢、C 生死に関する話し合いの応答は、理論的な枠組みに依拠してされている実践であり、その現場での多様性について整理できた。これらのデータから、ビハーラ活動者が実践活動の多様性を学んだり、自身の活動のチェックを行うことができると考えられる。またロールプレイなどを通じた学習にも活用できると考えられる。

V 結論と本研究の問題点

ビハーラ活動について、梯(1994ab)は阿弥陀仏を中心とした実践であると述べ、奈倉(1994)は生きる事の主体的意味に目覚め、生死を超えて「今」を生き抜く勇気をもたらすことが目的である、と述べている。本研究結果から、活動者は以上のような理念を基盤として活動していることが明らかとなった。お念仏を中心とした常行大悲の実践が、A 仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答やC 生死に関する話し合いに現れていたと言える。また、ビハーラ活動が重要視している心理カウンセリングの視点についても、B 相手に寄り添い・共感・共に考える姿勢としてみることもできた。さらに、本研究結果においては、それぞれの具体的な応答の多様性について述べた。他には、D 生活や医療的なサポート、E 新しい考え方の提示やアドバイスといった応答も見られたが、これらは今後臨床における影響について検討する必要がある。

あると考える。

本研究の設定は、ビハーラ活動者が癌患者から生死の問題を問われているという状況を設定した上でのアンケートであった。そのため、癌患者が生死の問題への関心を強く持っている場合を想定されている。浄土真宗本願寺派の活動は、特別養護老人ホームを中心に広がっているため、このような状況は現場において多くないかもしれない。

しかしながら、本アンケートのような問いは生死の問題の中心に関する問いであり、ビハーラ活動に共通している問いである。本調査の結果は、それぞれの実践を再検討する基準になる。また活動者自身がこの問いについて考えることで、死生観を再検討でき、実践場面での問題に柔軟に対処できるようになると考える。

また、ビハーラ活動者の相手が生死の問題への関心が低い場合は、本論文のA 仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答では、相手のニーズとの差が非常に大きくなると考えられる。このような場合は、B相手に寄り添い・共感・共に考える姿勢の応答によって信頼関係を構築し、活動者の相手自身がそれぞれの問題について考えていくことになると思われる。そうすることで、A 仏教・宗教・ほとけ・いのちに関する応答やC生死に関する話し合いといった問題についても、話しやすい環境を整えることができる。

生活や医療的なサポート(D)や新しい考え方の提示やアドバイス(E)の対応に関しては、介入的な要素が強く、活動者が相手に影響を与えるため、行う場合は注意して行うべきである。このような影響を強く与える活動を行う場合は、スーパーヴァイザーからの指導をもらうことも必要である。

本研究は、自由記述のアンケートを分類により分析した。このことでビハーラ活動者の多様な実態の一部を把握できた。しかしながら、今回の自由記述式の調査方法では統計的な検討は加えられない。これはデータが文字データであり単純に数量化できるものではないため統計的な分析が難しく、またサンプルも全体を把握するためにはより多くのデータが必要と考える。今後、本研究を基礎として質問紙を作成し、全体的な傾向を把握することが必要である。その時、ビハーラ活動者だけではなく、一般のボランティアや大学生から回答を得て比較検討し、ビハーラ活動の特異性について考察する必要がある。

また、本研究は自由記述のアンケート形式であり、実際の場面の相互作用を分析できていない。今後は本研究の成果を元にして、実際のフィールド調査を行うことができる。そうして実態を明らかにされたことを、ビハーラ活動の理論的な視点から検討を加えることにより、ビハーラ活動のための理論は発展し、ビハーラ活動が生死の問題や高齢者の問題に対して、より効果的に活躍することができると考える。

引用文献

- 本願寺新報：(1986) 本願寺新報、11月20日
- 梯實圓：(1994a) 聖典セミナー「歎異抄」、本願寺出版社
- 梯實圓：(1994b) 仏教の生命観、浄土真宗本願寺派ビハーラ実践活動研究会編、ビハーラ活動—仏教と医療と福祉のチームワーク—、本願寺出版社
- 伊東秀章：(2010) ビハーラ活動の展開と今後の課題について、龍谷大学教育学会紀要、第9号、pp. 17-33
- 伊東秀章：(2011) 浄土真宗本願寺派におけるビハーラ活動の展開と現状の課題、龍谷大学教育学会紀要、第10号、pp. 60-64
- 浄土真宗本願寺派社会部：(1999) ビハーラ活動10カ年総括書、<http://social.hongwanji.or.jp/>
- 柏木哲夫：(2001) ターミナルケアとホスピス、大阪大学出版会、p. 13
- 木下康仁：(2003) グラウンデッド・セオリーアプローチの実践、弘文堂
- 教学伝道研究センター編：(2004) 浄土真宗聖典 注釈版第二版、同朋舎
- 小池眞規子：(2004) カウンセリングにおけるクライアントの活動、福島脩美・田上不二夫・沢崎達夫・諸富祥彦、カウンセリングプロセスハンドブック、金子書房
- 奈倉道隆：(1994) 医療・福祉と共にあるビハーラ活動—チームの中でのビハーラ活動の役割—、浄土真宗本願寺派ビハーラ実践活動研究会編、ビハーラ活動—仏教と医療と福祉のチームワーク—、本願寺出版社
- 大谷光真・上田紀行：(2010) 今、ここに生きる仏教、平凡社
- Rogers, C. (1942) Counseling and Psychotherapy: Newer Concepts in Practice Houghton Mifflin Company (末武 康弘・保坂 亨・諸富 祥彦 2005 カウンセリングと心理療法 実践のための新しい概念 岩崎学術出版社) pp. 120-218
- 佐藤郁也：(2008) 質的データ分析法—原理・方法・実践、新曜社
- Saunders C., Summers D., Teller N.: (1981) Hospice: the living idea, Edward Arnold, London、岡村昭彦監訳 (2006)：ホスピス その理念と運動、雲母書房、p. 12
- 田宮仁：(1986) 佛教を背景としたホスピス／ビハーラ (Vihaāra) の開設を願って、ライフサイエンス=Life science、13巻1号、p. 58
- 友久久雄：(2002) 輝くいのちをみつめて、本願寺出版社